



近年、「お寺で落語」がブームとなっている。落語家を招き、高座を通してお寺やみ教えに親んでもらう催しが各地で好評を博し、テレビ番組や本などで仏教と落語の関わりが紹介されることもしばしば。なぜお寺で落語なのか。10月22日に築地本願寺(東京都中央区)で開かれた「落語の中の浄土真宗—新作落語口演と対談」(写真上下)から探った。



を展開させてきた歴史的背景を紹介。また、落語のネタに使われる笑い話や風刺、教訓を多数収めた『醒睡笑』の著者・安楽庵策伝が浄土宗の僧侶であり、その後、江戸中期に成立する落語が、仏教と密接に関連していることを明かした。そして、釈さんは「和服姿の演者が(仏教が説教で用いた)高座に上がり、一人で聴衆に語る落語は、僧侶の法話の姿そのもの。仏

ことにつながると熱く語った。日本の芸能や文化に通底する仏教と、お説教の性格を色濃く残している落語、その深い関係が明かされた。

釈さんは、落語がお寺で演じられることを歓迎しながら、「あくまでもお寺は伝道、お取り次ぎがメイン。落語を法座の人集めのイベントにするのは、落語にとっても失礼」と、お寺での落語の「楽しみ方」に言及し、「互いの歴史的背景、文化性を知ればどちらももっと楽しめる。そのために、仏教も落語も輝く工夫が必要」と結んだ。

# 「お寺で落語」がブーム

## 築地本願寺で対談と真宗的落語

150人余りの観客で満席となった会場に軽やかな出囃子が流れる。上方落語の笑福亭松喬さんが高座に上がり見台(小さな机)に小拍子(拍子木)を「ピシヤリッ」。関西弁の語りとともに口演が幕を開けた。

落語のセオリーや噺の背景を交えながら枕(本筋の前段)を振り、やがて合図とばかりに羽織を下ろし、ネタが始まった。軽快な語りと間に、笑顔の客席から弾けた笑いが起る。次第に話し手と聞き手が一体となるような感覚に包まれ、ふわりと沈むようなサゲ(オチ)が心地よい余韻を残した。

松喬さんが演じたのは、

面親がお座(法座)に出かけているうちに娘が恋人を自宅に招くという「お座参り」と、篤信の門徒が多い大阪・船場を舞台に蓮如上人の「御文章(お文)」が噺の鍵を握る「お文さん」。

いずれも近年、途絶えかけていた真宗ゆかりのネタで、落語に造詣の深い宗教学者の釈徹宗さん(相愛大

教授、大阪府池田市・如来寺住職)が、わずかな資料を参考に松喬さんらの協力を参考にしたもの。「お座参り」はこの日が初演。

隅々まで張られた噺の伏線や門徒にうれしい仏教ネタが詰まり、観客からは大きな拍手が寄せられた。

続いて釈さんが、多田修さん(本願寺派総合研究所東京支所研究員)との対談

で落語と仏教の関わりについて、歴史や文化的側面を踏まえて解説。

踊りや歌などを交えた宗教儀礼などに発展・成熟していった日本の芸能文化の特徴や、特に浄土仏教が聞

く「語る」「共振する」「場を感じる」という宗教性を大切にしながら、説教(法話、法座)による伝道形態

教の影響を色濃く受けている」とした。

さらには「芸能や音楽やアートには、人と人の境界をやすやすと越える力がある」と心を揺さぶる芸能や豊かな文化に、信仰や教義という宗教(宗派)の境界線を下ろす役目があると

示唆。お寺で落語を親しむことが宗教と日本の伝統芸能、相互の文化性に触れる



『おてらくご 落語の中の浄土真宗』釈徹宗著(お文さんなどの落語CD付)本願寺出版社刊。1,890円。